

市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

〔昭和61年度〕

1987・3

小松市教育委員会

市内遺跡詳細分布調査報告書 I

〔昭和61年度〕

1987・3

小松市教育委員会

例 言

1. 本書は石川県小松市教育委員会が昭和61年度に文化庁国庫補助金を受けて実施した市内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 本年度の調査は東部地区、特に若杉町周辺の地区と南部地区、特に窯跡が存在する支谷部分の地域を対象とし、小松市教育委員会職員があたった。
3. 遺跡の名称については、宮下幸夫、望月精司が決めた。
4. 遺物整理・実測・写真撮影については、石田和彦、宮田佐和子、江野直子、松原修一の協力を得て、宮下、望月が行った。
5. 本書の執筆は、Iを樫田誠が、II-1、III-3を宮下が、他を望月が行い、編集は小村茂の指導のもと、望月が行った。
6. 報告書を作成するにあたり、資料の提供をいただいた近間強氏をはじめとして、次の方々に御教示を賜った。記して謝意を表したい。

(以下、敬称略)

木立雅朗、小嶋芳孝、田嶋明人、出越茂和、谷内尾晋司、湯尻修平

目 次

I	調査の目的	1
II	調査の概要とその成果	2
	1 東部地区	2
	2 南部地区	2
III	遺跡と遺物の概要	4
	1 戸津古窯跡群	4
	2 ニッ梨横川古窯跡	5
	3 湯上谷古窯跡	7
	4 上荒屋ハカクタ二古窯跡	8
	5 上荒屋ハウジョウヤマ遺跡	8

I 調査の目的

小松市域は地形的特徴によって、いくつかの区域に分けることができる。小松市東南部には、いわゆる白山山系の北西縁部にあたる広大で険しい中山性山地がひろがり、次第にその高度を減じて漸次丘陵部へと移行する。この丘陵部は、梯川下流域の広大な沖積平野に面して能美丘陵の一角を成す小松市東部丘陵地と、加賀三湖により形成された潟埋積平野及び江沼盆地に面する江沼丘陵の一角、東南部丘陵地に便宜上区分される。小松市の遺跡分布は、この地理的条件に適応するかたちで展開している。梯川流域の低湿平野は、水運の便や農用適地のもとで形成された大規模な複合集落が密集し、それをのぞむ東部丘陵地には古墳群がひろがりをみせる。また、南部の加賀三湖にはさまれる台地上には、縄文時代及び弥生時代から中世までいたる遺跡が存在し、東南部丘陵地には日本海側有数の規模を誇る南加賀古窯跡群がある。これら多くの遺跡の大半は近年の開発行為の増大によって表出したものであり、常に緊急性を帯びた中での新規発見遺跡として、必ずしも十分な実態把握を経て名を連ねてきたものではない。小松市における大規模開発の先駆けは昭和52年よりはじまった「公害防除特別土地改良事業」にある。梯川流域の水田地帯は、その支流郷谷川の上流にあった尾小屋鉦山が排出した長年にわたる鉦毒（カドミウム）の蓄積があり、この汚染土壤の除去は、この地に形成された県内有数の大規模複合集落遺跡を緊急発掘のもと消失せしめた。また、その客土用土は東南部丘陵地の良質砂質土に求められ、南加賀古窯跡群の土採取事業による破壊というまさしく悪循環を招いている。また、この農用地の確保は宅地造成の波を丘陵地に向けさせる要因ともなっている。さらに、市には粟津温泉という歓楽保養地があり、その観光目的としての諸施設が古窯跡群の詳細が未だつかめていない丘陵地に展開しつつある。梯川流域の平野部における調査は、県立埋蔵文化財センターが主体的に進めてきたカドミ対策に係る調査により、かなり状況が鮮明となってきたものの、南部域の台地及び丘陵地に関しては、殆んど実態不明のまま、大小の開発の波がおしよせてきており、過去のゴルフ場造成に伴う広域破壊を再招しかねない実状にあるといえる。東南部の山々は未だ森林状態の部分が多いが、それゆえに、遺跡の発見は工事着手後という後手の対応となり、埋文保護行政にあっても、また開発業者にあっても、相方に緊縛した結果を生み出している。この様な状況を鑑みて、南加賀古窯跡群を中心とした詳細な分布調査の必要性が浮上してきたわけである。本古窯跡群は昭和53年に国庫補助金を得て、詳細分布調査が実施されている（南加賀古窯跡群詳細分布調査事業報告書）。しかし、開発状況は進展し、むしろ虫食状態とも言える土採取の増大は、より詳細かつ個別的な分布の把握が必要となっていると言えよう。今回の報告は、近年大規模な開発計画の挙げられている東部地区と南部地区を調査対象として実施された分布調査の報告であるが取り挙げたものの大半は新発見の遺跡であり、分布調査の必要性をより一層痛感させるものである。小松市内で周知されている遺跡は、未だその実態を掌握できていないものばかりで、未発見地域における遺跡の分布調査とも合わせて、速急に対応すべき課題であろう。

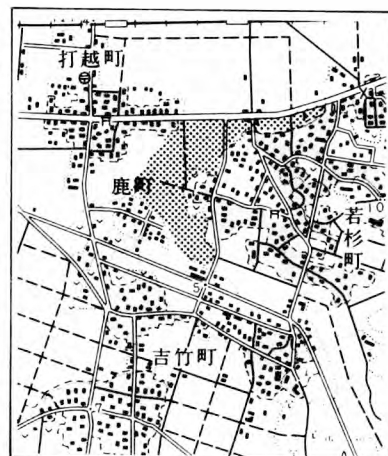
II 調査の概要とその成果

1. 東部地区

東部地区は、若杉町地区のナ、ニ、ハの部の承諾の得られた田面に1㎡の試掘坑を39箇所設定、地山面まで掘り下げを行った。また、若杉古窯跡下方の灰原推定地に巾2m、長さ10mの試掘溝を設定、掘り下げを行った。

その結果、試掘溝部分においては、耕作土の下に青灰色粘土層があり、その下部は砂礫混りとなる土層を確認した。試掘坑部分では、たび重なる耕地整理（最近では昭和初期に大規模に行った）で、削平、盛土がほとんどの所で認められた。

試掘坑、試掘溝どちらにおいても、遺構、遺物の検出はなかった。よって、吉竹遺跡、打越遺跡はこの調査区域には及んでおらず、若杉古窯跡の灰原も存在しなかった。



(第1図 東部調査区 (1:10,000))

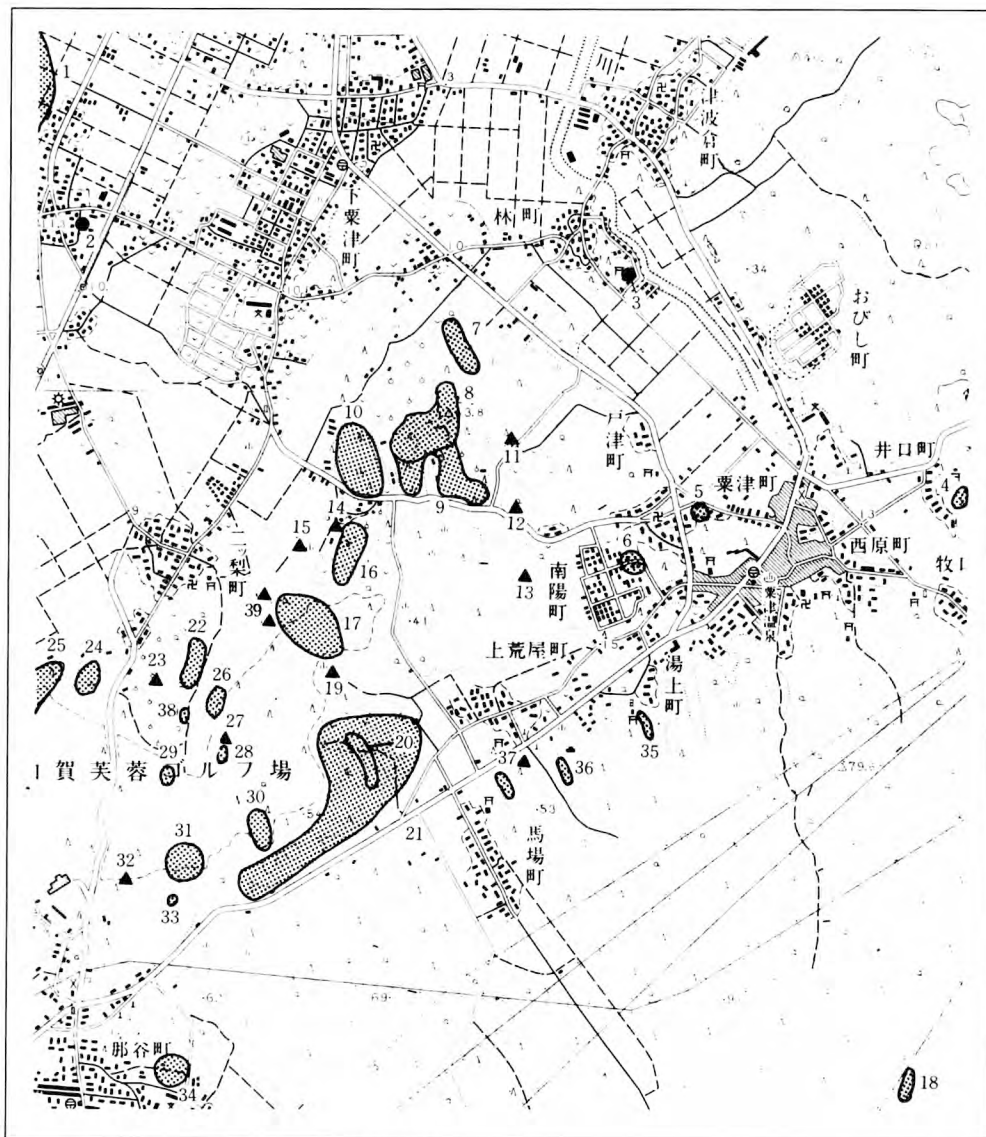
2. 南部地区

今回の調査は二ッ梨町より那谷町へ抜ける主谷、通称大谷及び奥谷の一部分そして湯上町、上荒屋町、馬場町の白山側の丘陵地、特に谷部を中心とした地域をその対象とした。

二ッ梨町の調査は周知の窯跡の分布位置と未発見の窯跡の存在を確認することと周知の窯跡の灰層が水田面まで広がるかを確認するため実施した。調査方法は田地約6haに1㎡の試掘坑144箇所設定し、地山層まで掘り下げて行った。この調査では1箇所において灰層の検出が認められ二ッ梨横川古窯跡とした。その他の箇所では遺物の散布は稀薄であり、灰層の検出もなかった。

湯上町、上荒屋町、馬場町の調査では主に踏査により窯跡の分布状況の把握を目的とした。この調査で、湯上町より南へ入り込む支谷に瓷器系窯跡（湯上谷古窯跡）が存在すること、上荒屋町より南へ入り込む支谷に瓷器系窯跡（上荒屋ハカントニ古窯跡）が存在すること、ハカントニと上荒屋町から馬場町へのびる主谷とに挟まれた舌状丘陵地に須恵器窯跡が5基、製鉄跡、中世墳墓群が複合して存在すること（上荒屋ホウジョウヤマ遺跡）が確認された。

南部地区の調査は、小松市東南部丘陵地に存在する南加賀古窯跡群の実態把握に重点がおかれたわけだが、今回の調査において、粟津地溝帯より白山側に位置する丘陵地にまで窯跡の分布が及ぶことを理解することができた。これは従来考えられてきた南加賀古窯跡群の分布範囲を塗りかえる発見であり、窯業生産の場を時代が下がるに従い、平野部に面した低丘陵縁辺部から各主谷及び支谷の奥へと入り込み、中世に至っては粟津地溝帯に面する両丘陵地縁辺部にその場を移している状況を想像させるものである。今回の調査は南加賀古窯跡群の一地域を対象としたもので、未だ実態の把握できていない地域が多い。今後の継続的調査によって、南加賀古窯跡群はもとより東南部丘陵地全域の実態の把握に務めねばならないであろう。



第2図 南部地区遺跡分布図 (1:10,000)

1. 矢田野遺跡
2. 中村古墳
3. 林八幡神社経塚
4. 井口神社製鉄跡
5. 戸津本蓮寺跡
6. 戸津1号製鉄跡
7. 林古窯跡群
8. 戸津六字ヶ丘古窯跡
9. 戸津古窯跡群
10. ニッ梨一貫山古窯跡群
11. 戸津5号窯跡
12. 戸津1号窯跡
13. 戸津2号窯跡
14. 豆岡山1号窯跡
15. 殿様池古窯跡
16. 豆岡山向古窯跡
17. ニッ梨古窯跡群
18. 西荒屋カマンガニ古窯跡
19. 上荒屋サンマイ谷古窯跡
20. 上荒屋古窯跡群
21. 上荒屋製鉄跡
22. ニッ梨東山古窯跡
23. 矢田野向山古窯跡
24. 矢田野製鉄跡群
25. 箱宮古墳群
26. ニッ梨横川古窯跡
27. 奥谷1号窯跡
28. 上荒屋横穴古墳群
29. ニッ梨製鉄跡群
30. 奥谷古窯跡
31. 那谷横穴古墳群
32. 那谷1号窯跡
33. 那谷1号製鉄跡
34. 那谷遺跡
35. 湯上谷古窯跡
36. 上荒屋ハカタンニ古窯跡
37. 上荒屋ハウジョウヤマ遺跡
38. ニッ梨脇釜古窯跡
39. 大谷古窯跡

III 遺跡と遺物の概要

1. 戸津古窯跡群（第3図、第8図、図版1、図版5）

小松市戸津町ヨの部19-1、17-4・5、18-1・2、19-2・7に所在。

小松市林町から加賀市松山町にかけて帯状に連なる標高45m前後の低丘陵には、須恵器及び中世陶器の窯跡が広く分布しており、「南加賀古窯跡群」と総称されている。戸津古窯跡群は、南加賀古窯跡群の北部に位置する一支群で、粟津町から西へ入り込む主谷中程の北側斜面、支谷、小支谷により分断された標高30m前後の独立丘陵上に立地する。本窯跡群は古くからその存在が知られ、現在まで数度の発掘調査及び分布調査によって、須恵器窯跡32基、土師器窯跡18基、瓷器系窯跡1基が確認されている。

今回調査の行なわれた区域は、昭和56～59年に発掘調査を実施した区域と通称「一貫山」の丘陵とに挟まれた南側へ舌状にのびる丘陵である。調査の経緯は文化財パトロール中に、周知の遺跡内で土砂採集工事を実施しているところを発見し、工事を中止させ、分布調査に入った。しかし、工事によりすでに丘陵の西側斜面の一部が削平され、須恵器窯跡の一部が破壊されていた。灰層及び窯体の分布は、舌状丘陵のほぼ全域において広く確認され、特に東側斜面に密に灰層が認められる。窯体で確認された基数は、須恵器窯跡8基で、丘陵斜面のほぼ中腹部に分布している。また、丘陵南側斜面の裾部では、土師器の散布が多く、土師器窯跡の存在する可能性もある。

採集された遺物は、須恵器、土師器、中世陶器である。図示した第8図1～7は西側斜面の半壊された須恵器窯跡の下方灰層より採集されたもので、他は東側斜面より採集された遺物である。以下に説明を加える。

1、2は須恵器蓋。1は口径18.3cm、器高3.5cmを測る製品で、やや山笠状に開く器形を呈す。調整は天井部にへら削りを施し、他はナデで仕上げる。2はゆがみの激しい製品であるが、口径16cm程度を測る。口縁部屈曲はやや鋭く、口唇部を下へ長くのばす。調整は1と同様。3～5は須恵器有台坏。3は口径17.5cm、高台径12.8cm、器高4.9cmを測る製品で、1とセット



第3図 戸津古窯跡群灰層分布図(1:5,000)

をなす身と思われる。高台の形態は外にふんばる形で、そのまま外傾する体部へ移行する器形を呈す。調整は底面でへら削りとカキ目状の痕跡を残し、他はナデで仕上げる。4は口径13cm、高台径7.6cm、器高4.1cmを測る製品。器形は外展する高台から体部で膨みをもって立ち上がり、やや外反する口縁部へ移行する。高台は長く、底部を薄く作る。調整は底面の一部と体部下端をへら削りしている。5は口径13cm、高台径6cm、器高3.8cmを測る製品。器形は外展する長い高台から体部で膨みをもって立ち上がり、外反する口縁部へ移行する。6は有台の須恵器長頸瓶または広口瓶の胴部破片。7は須恵器甕の口縁部破片。口縁端部は外に摘み出す形態を呈し、その下に一条の突帯と波状文をめぐらす。以上の遺物は1・3のようなサクラマチ3号窯に近い様相をもつ土器と2・4・5のような桃の木山1号窯1次床に近い様相をもつ土器の2時期の様相が存在する。しかし、1・3においてもへら削りを施すといった古い様相をもそなえていることを考えて、以上の資料を一括として促えれば、木立氏の編年⁽¹⁾でいう筋生城山奥窯段階に位置付けたい。

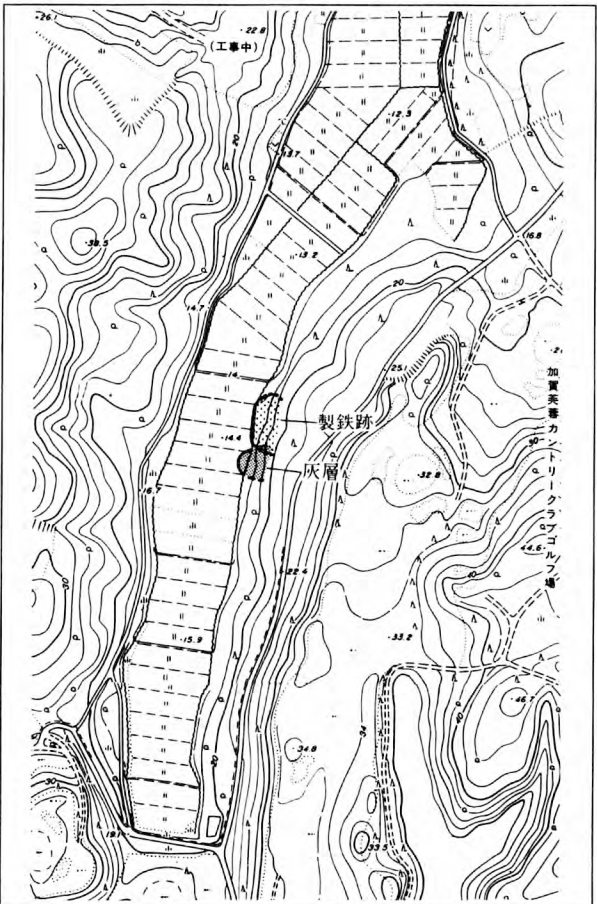
8は須恵器有台碗の高台部付近の破片。高台はやや長く外にふんばる形態で、体部の器肉は薄い。底面はナデにより切り離し痕を消去している。有台碗出現期頃⁽²⁾の製品と考えたい。9は土師器小形甕の口縁部破片である。10は底面に糸切り痕を残す土師器で、器種は壺と思われる。これらの他にも東側斜面では多くの須恵器が採集されており、9世紀～10世紀頃の窯跡が主体を占めるとと思われる。

2. ニッ梨横川古窯跡（第4図、第8図、第9図、図版2、図版5）

小松市ニッ梨町テの部4、5に所在。

本窯跡は南加賀古窯跡群の東北部に位置する支群で、ニッ梨町から那谷町へ通る主谷、通称大谷と奥谷との境付近、東側斜面に立地する。この主谷の両側斜面には、ニッ梨東山古窯跡、ニッ梨脇釜古窯跡⁽³⁾、大谷古窯跡、奥谷古窯跡、那谷1号窯跡が分布している。

本窯跡の発見は、ニッ梨町土地改良事業に先立って、小松市教育委員会が実施したニッ梨町大谷地区試掘調査によるも



第4図 ニッ梨横川古窯跡灰層分布図 (1:5,000)

のである。丘陵斜面の裾部は水田の排水溝により切断されており、その断面に厚さ40～50cmの須恵器、窯壁片を含んだ黒色灰層が見られる。この灰層は排水溝断面より水田にかけて5mの範囲で分布している。以上より、この灰層は須恵器窯跡の灰層と推察されるわけだが、窯体の基数については断面において灰層の切り合いが観察できないこと、遺物がほぼ同一時期であることを考えて、1基であると考えたい。また、この灰層の北側には土器を含んでいない黒色灰層が排水溝断面で観察でき、周辺区域で鉄滓が採集できることから、製鉄跡の灰層である可能性をもつ。

採集された遺物は全て須恵器である。第8図11～19は蓋。口径は15で13.2cm、16で13.5cm、17で12.5cm、18で14.7cm、19で13.7cmを測る。器形は天井部で丸味をもつもの(11・16)と平坦なもの(17・18)が存在し、口唇部はいずれも丸味をもって短く屈曲する。鈕の形態は比較的しっかりした宝珠形を呈すもの(12)とやや扁平なボタン状の宝珠形を呈すもの(11・13)が存在する。調整は天井部にへら削りを施すもの(15・17・18)が多く、ナデ調整のみは少ない。第8図20～23は無台坏。20・21はそれぞれ口径14.1cm、14.6cm、底径10.5cm、11.5cm、器高3.5cmの法量で、底部から丸味をもって立ち上がり、直立気味の体部へ移行する器形を呈す。底面は回転へら切り無調整。22は口径12.6cm、底径9.5cm、器高2.8cmの法量で、底部から明瞭に屈曲して立ち上がりやや外傾する体部へ移行する器形を呈す。第9図1・2は有台坏の高台部付近の破片。高台径は7.5cm、8.5cmを測り、高台の形態は断面台形で短いもの(1)と断面平行四辺形で外にふんばるものが存在する。第9図3～6は無台盤。3・4のように口径14.4cm、器高1.2cm、1.4cmの法量で、底部から短く直立する体部をもつ扁平なタイプと5・6のように器高2.1cm、2.4cmを測り、底部からやや外傾気味に立ち上がる身の深いタイプが存在する。調整は3の底面の一部にへら削りの施される以外は全てナデ調整である。第9図7～9は有台盤。法量はそれぞれ口径20.5cm、21.7cm、21.6cm、高台径16.8cm、16cm、17.2cm、器高4.3cm、4cm、4.1cmを測る。器形は底部から明瞭に屈曲して直立またはやや外傾して立ち上がるもの(7・8)となだらかに屈曲して立ち上がるもの(9)があり、高台についても端部が鋭い角をもつ形態(7・8)と端部が丸味をもつ形態(9)とに分けられる。底部の調整は回転へら切り後ナデを施すものである。10は高坏の脚部破片。11は口径9.1cmを測る小型広口壺。12は口径10.6cm、器高2.3cmを測るもので、焼台と思われる。13・14は甕の胴上部破片。15は塙。口径32.4cmを測り、内外面にカキ目調整を施す。

さて、以上の土器群の編年観について考えてみたい。これらの土器群は、蓋の折り返しが丸味をもち、外面で面の形成しないことやくずれたボタン状の宝珠鈕が存在すること、無台盤において底面にへら削りを施し、短く直立する体部を有するタイプが存すること。無台坏において底部から丸味をもって立ち上がる器形を有するものが存在することなどから考えれば、和気後山谷2号窯跡に近似した様相である。しかし、和気後山谷2号窯において見られる有台盤にへら削りを施すのに対し、本窯跡の有台盤にはへら削りを施したものはなく、やや新出の器形のものも存在することや、無台坏の器形に底部から明瞭に屈曲して立ち上がるものが存在することなど

から考えれば、和気後山谷2号窯段階でもやや新しい様相をもつ土器群と考えたい⁽⁴⁾。吉岡康暢氏の編年⁽⁵⁾で言えば、II期の中でもやや古い段階に位置付けたい。

3、湯上谷古窯跡（第5図、第10図、第11図、図版2、図版6）

小松市湯上町トの部

本窯跡は白山山系の前山地帯の北西部に位置し、湯上町から南へ入る支谷、通称湯上谷の西側斜面に立地する。窯跡の存在は近間強氏の分布調査において発見されたもので、湯上町八幡神社より谷を南へ入ったところの水田の排水溝に切断された尾根裾部の断面に黒色灰層が露出している。灰層の拡がりはこの断面において20～30mに及んでおり、大規模窯跡の存する可能性をもつ。

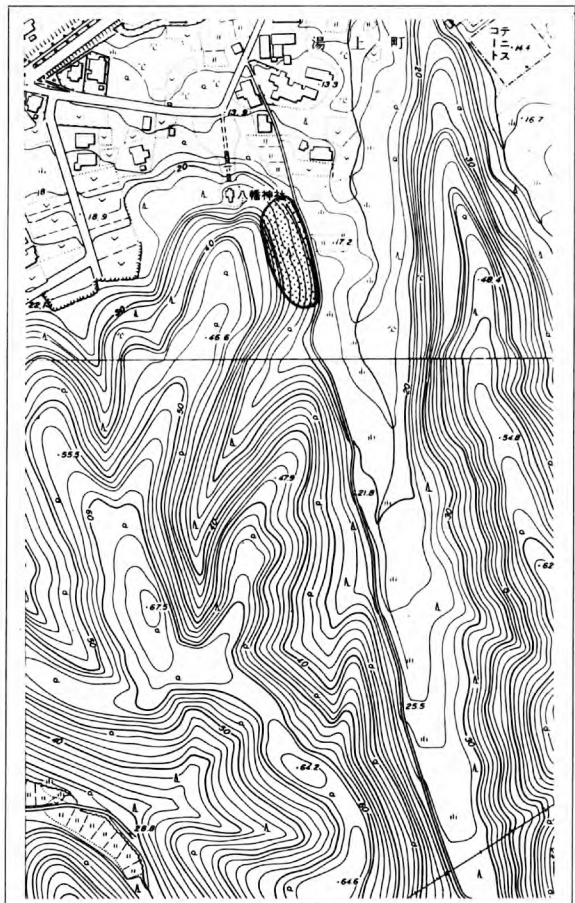
採集された遺物はいわゆる瓷器であり、中世加賀古窯製品（加賀古陶とも言う）である。器種は甕と播鉢片であり、壺は確認できなかったが、表採であるので断定できない。また、押印の施された破片も認められた。以下、それらについて略述してみる。

甕（第10図）で図示したものは、口縁部のわかるものだけであるが、1は口径41.2cm、2は34.5cmと小さく、3は43.8cmを測り、どちらかと言えば、中甕の部類に入るものである。いずれも口縁部が明瞭なN字状を呈するものである。

1・2に比べて、3は外への張り出しが大きくなっていて、縁帯の窪みが認められず、厚くはれぼったくなっている。内面には粘土紐の接合部を指頭により押えつけ、いわゆる面取り状を呈している。

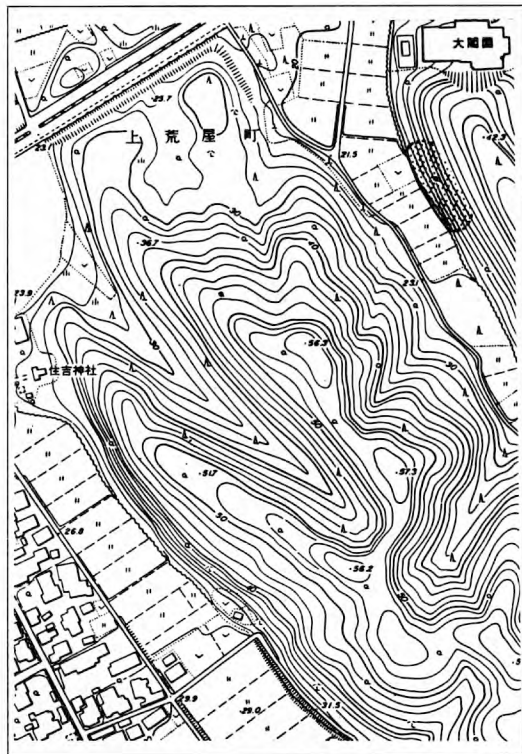
播鉢はいずれも高台を有しないもので、4は口径32.2cm、器高11.3cmを測るものであり、5もほぼ同じ法量のものであろう。口縁端はほぼ水平になり、外面はへら状具による面取りが施されているが、顕著ではない。内面はヨコナデが粗雑に行われていて、オロシ目は一条か二条認められ、下から上へ描かれていて、交差するものもみられる。破片であるので、片口かどうかは不明である。

押印は採集できたものだけで8種類が認められ、そのうち7種類図示した（第11図）。1は中央に菊花を配し、左に×印を二段に右ははっきりしないが、おそらく斜格子を配していると考え。2は左に菊花、右に



第5図 湯上谷古窯跡灰層分布図（1：5,000）

格子を組み合わせたパターンである。3 ははっきり出ていないが、格子の組み合わせで、真中に2段に縦長の格子を配し、上下に更に2段ずつ、ほぼ正方形の小さい正格子が認められる。4 ははっきりしないが、左右に斜格子、中に平行の刻線を配していると思われる。5 はやや複雑パターンである。右に縦線に斜めの線を組み合わせた格子を描き、左は全体を9区画に分け、左端の真中は×で描き、残りは左下がりの平行線と右下がりの平行線を交互に組み合わせている。6 は5の右側の格子に更に横線を組み合わせたもので、左側は欠けていて不明。図示しなかったが、この押印のある破片には上段にもう一種の押印が認められる。それは一部であるのではっきりしないが、二重の線で構成される斜格子であるが、6の左側の区画に配されていたパターンの可能性もある。7 は全体を4区画に分け、左上と右下の区画はやや雑な斜格子を配し、他は左上、右下よりの同心円の $\frac{1}{4}$ の線の組み合わせである。



第6図 上荒屋ハカントニ古窯跡灰層分布図
(1:5,000)

以上、採集された遺物について略述してきたが、それによると、当窯跡はカミヤ古窯跡に後出するものと考えたい⁽⁶⁾。

4、上荒屋ハカントニ古窯跡（第6図、図版6）

小松市上荒屋町ニの部4番地、ホの部22番地に所在。

本窯跡は粟津町から那谷町へぬける粟津地溝帯を北側に望む白山山系の前山地帯の西北端に位置し、上荒屋町より南東に入る支谷、通称ハカントニの開口部付近の北東側斜面に立地する。窯跡の発見は上荒屋ホウジョウヤマ遺跡の試掘調査中に地元の人から当地に窯が存在するのを聞き、確認したわけだが、灰層の分布状況については隣接する太閤園の拡張工事に伴って確認した。窯跡が存在する斜面は、谷部水田の排水溝によって切断されており、その断面に中世陶器を含んだ黒色灰層が露出していた。断面での灰層の拡がりは、幅約5～10m、厚さ20～30cm程度で、複数の窯体の存在は考え難い。

本窯跡の分布調査は近間強氏も行っており、その際に採集された遺物を実見したところによれば、カミヤ古窯跡よりもやや新出する様相をもつ土器群であり、前述した湯上谷古窯跡にはほぼ併行する時期と考えて差し支えないだろう。

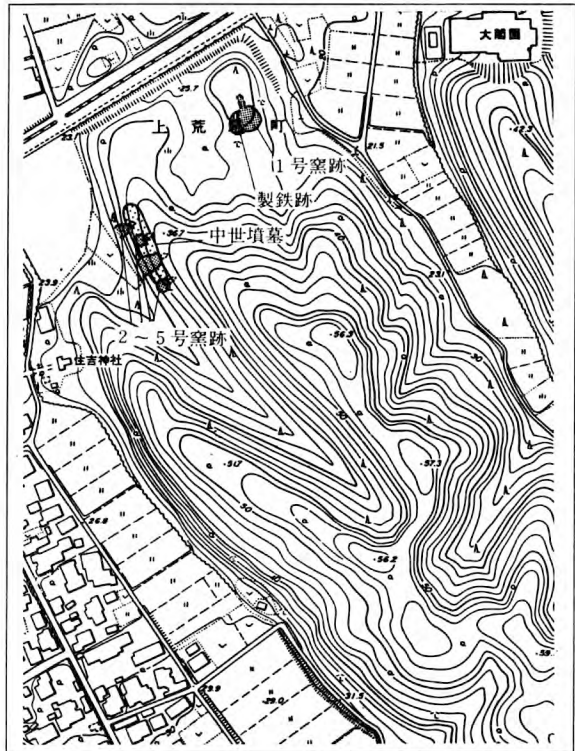
5、上荒屋ホウジョウヤマ遺跡（第7図、第12図、図版3、図版4、図版6）

小松市上荒屋町トの部94番地、ニの部31番地、馬場町(一)の部1番地に所在。

本遺跡は上荒屋町から南東に入る支谷(ハカントニ)と上荒屋町から馬場町へ入る主谷とに挟まれた舌状丘陵、通称ホウジョウヤマに立地する。遺跡の発見は民間レジャー施設建設に際して小松市教育委員会が試掘調査を実施した結果によるが、南西側斜面の遺跡分布状況については、近間強氏より御教示を受けた。

遺跡の分布はハカントニに面する北東側の支丘と馬場町に面する南西側斜面に分けられる。北東側支丘の南側斜面は工事用道路により切断されており、その断面に須恵器片を含む黒色灰層が製鉄炉跡と思われる焼土化した落ち込みを切って存在しており、周辺に須恵器片、鉄鏢が散布している。須恵器窯跡と思われる灰原(1号窯跡)は厚さ20~30cm、幅5m程度にひろがっており、ボーリング調査においても1基のみの窯体しか確認できなかった。製鉄跡は道路切断面で2基の炉跡が確認されているが、灰層の拡がりは5m~7m四方の範囲まで及んでおり、まだ数基存在すると予想する。南西斜面では谷部造成地により切断された斜面の断面に、須恵器を含んだ黒色灰層が3箇所確認され、ボーリング調査でも窯跡であることをほぼ確認できた。また、この断面では確認できなかったが、尾根の中腹部斜面においても、林道によって切断された面に窯壁が一部露出しており、須恵器窯跡は計4基(左から2~5号窯跡)存在すると考えられる。また、この斜面はテラス状にカットされた面を2段もち、その平坦面に五輪塔や墓石と思われる切り石が数多く散乱して、ひろく60~70mの範囲に分布している。そして、谷部断面にも黒色土中に骨片と思われるものが混入していることや経塚と思われる小礫を葺いた盛り上がり1基確認されており、広い範囲に中世墳墓群が存在すると考えられる。

今回図示した遺物は1号窯跡より出土した須恵器である。1・2は無台坏。1は口径11.4cm、器高2.6cmを測る製品で、底部切り離し痕はナデにより消去している。2は口径14.4cm、器高2.7cmを測る製品。3は碗の体部破片。口径13.4cmを測り、内彎気味の体部をもつ。4は有台皿または無台皿の体部破片。口径13.4cmを測る。5・6は有台碗の高台部破片である。5は高台径7.5cmを測り、外にふんばる高台の形態を呈す。底面の中央部に糸切り痕が残存する。6は高台径7.6cmを測る。7は広口鉢の胴



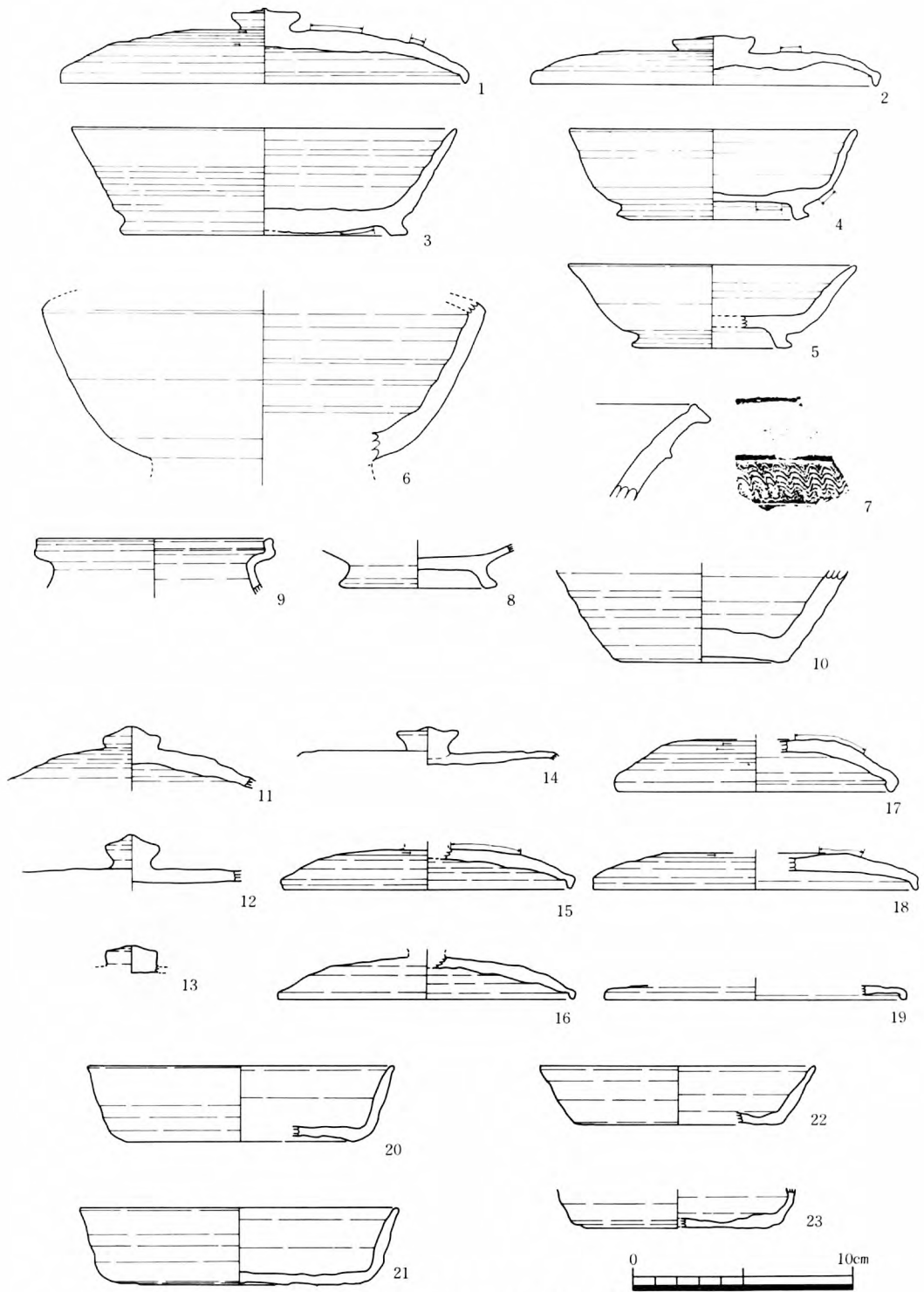
第7図 上荒屋ホウジョウヤマ遺跡(1:5,000)

部中位以上の破片。胴部は肩の張りが弱く丸味をもって立ち上がり、頸部で屈曲して直立気味の口縁部へ移行する。8は甕の胴部破片。内外面とも平行叩きを施しており、内面のみ後にナデ調整している。以上の土器は、有台碗の高台の形態や広口鉢の肩部の張らない形態などから考えて戸津35号窯跡に近似した様相を示しており、戸津4号窯式期⁽⁷⁾の古い段階に位置付けることができるだろう。

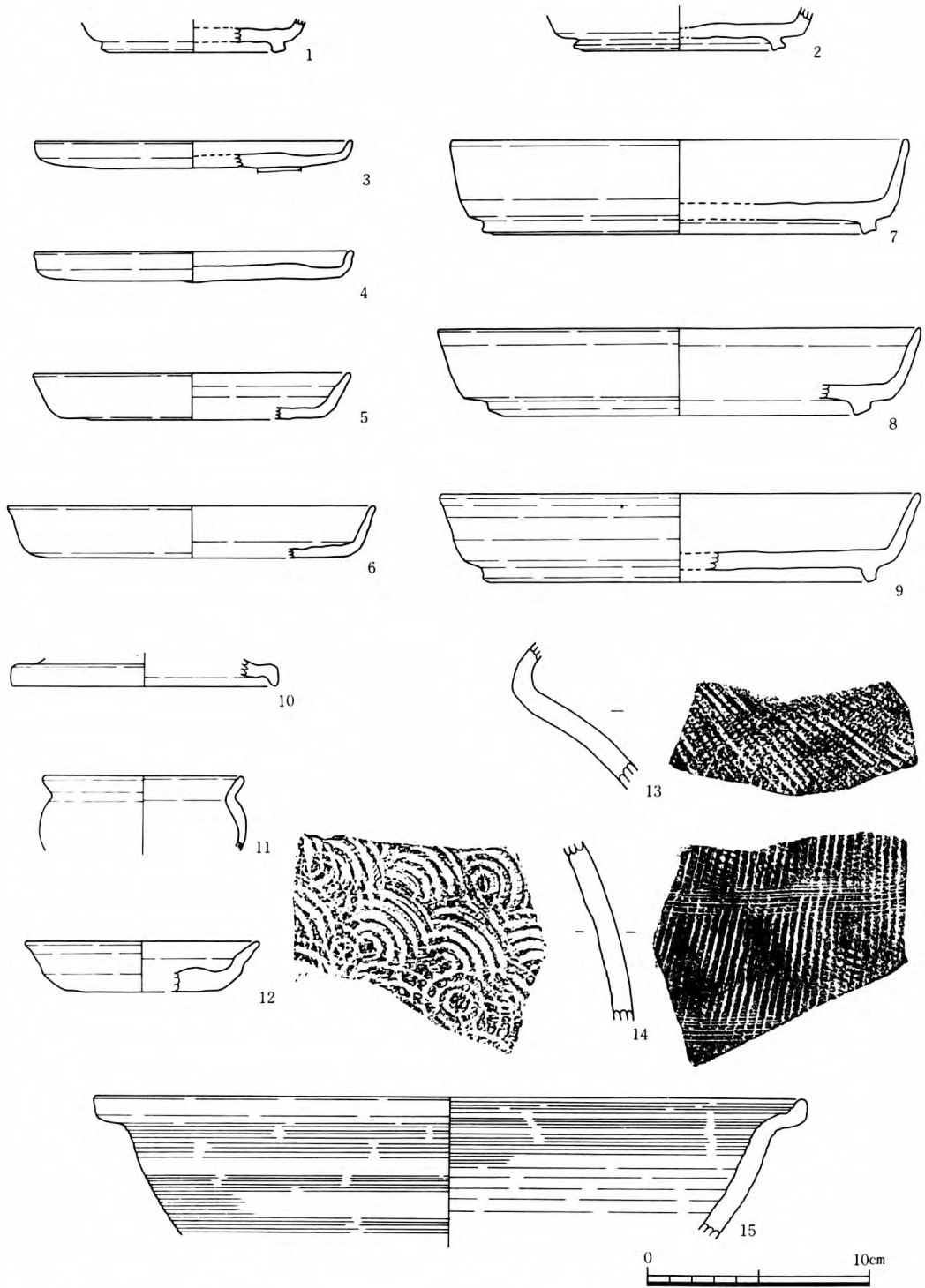
南西側斜面において採集された遺物は須恵器窯跡の製品と思われる須恵器及び瓦、そして中世墳墓群関連の遺物と思われる中世陶器及びカワラケ類である。須恵器は小片が多く、正確な時期を考えるには至らないが、平安時代中期頃の所産と考えている。中世陶器は近間氏の採集した中に越前焼と思われる壺が有り、室町時代前期頃と思われるが、五輪塔の形態は、14世紀中頃から15世紀前半頃にかけての所産と考えられ、長期にわたり営まれた墓地であると考えたい。

註

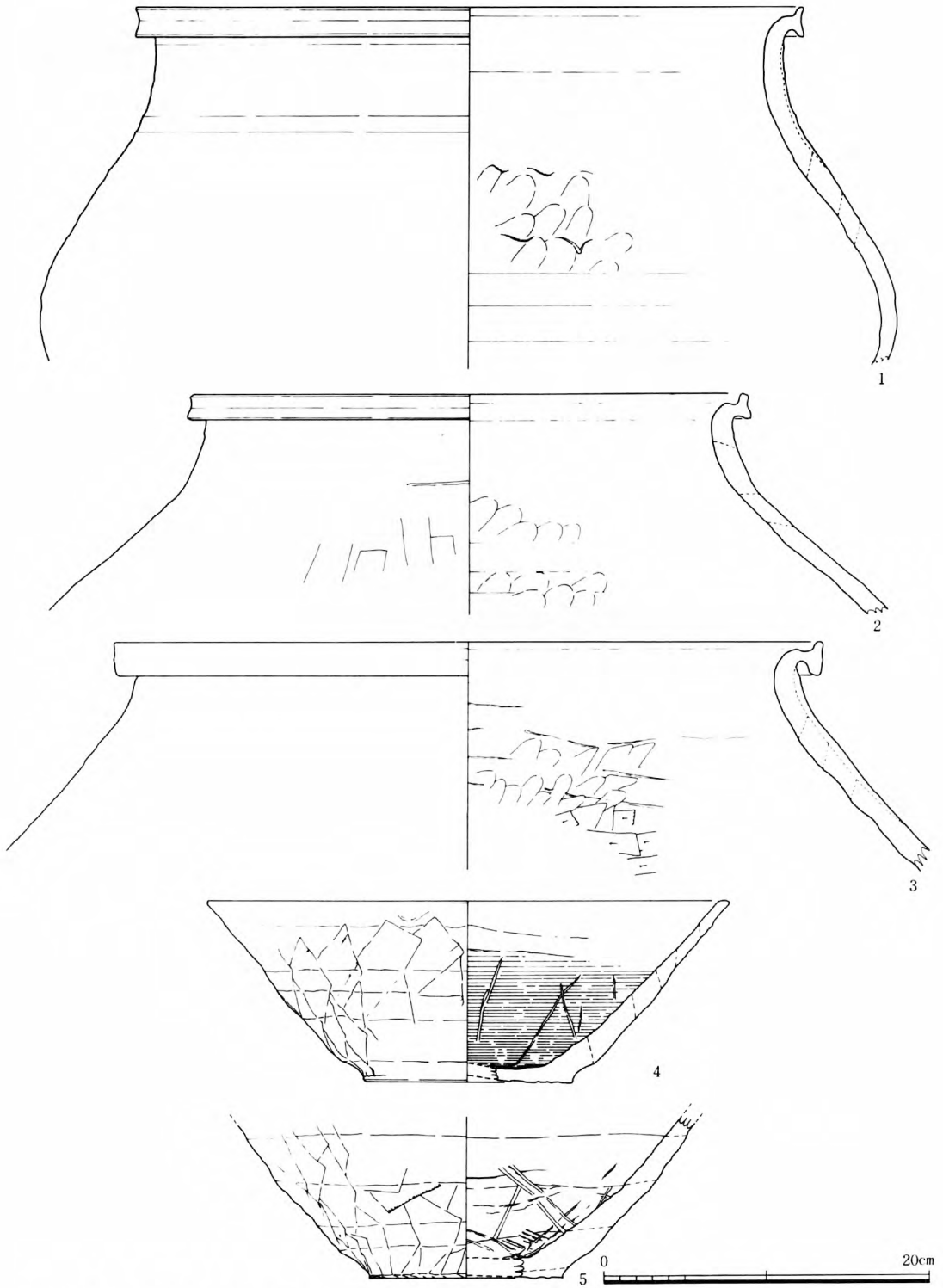
- (1)、木立雅朗 「第6章 第1節 能美窯跡群の須恵器編年(1)北群『辰口町湯屋古窯跡』石川県辰口町教育委員会 1985
- (2)、有台碗が須恵器において出現するのは、戸津古窯跡群においては、戸津39号窯跡の時期で田嶋明人氏の提唱される3期区分（戸津9窯式→戸津4窯式→戸津3窯式）の中では、戸津9号窯式期の新しい段階に位置付けられる。
- (3)、窯跡の存在に関しては、近間強氏より御教示を受けた。
- (4)、中村英洋 「第6章 第1節 能美窯跡群の須恵器編年(2)南群」『辰口町湯屋古窯跡』石川県辰口町教育委員会 1985、尚、和気後山谷2号窯及び和気峠山1号窯の様相については木立氏より御教示を受けた。
- (5)、吉岡康暢 「第2部 第2章 奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会 石川考古学研究会 1983
- (6)、カミヤ古窯跡の甕は口縁をめぐる縁帯が比較的狭いが、明瞭なN字状を呈し、下端が垂れ下がる形態を示す。特に大甕にその傾向が強く、中小甕にはその傾向は少ない。実年代は若干の異論があるが、後出するカマンダニ古窯跡及び本古窯跡の発見ではほぼ定められると考え、カミヤ古窯跡は14世紀前葉～中葉とし、本古窯跡は14世紀中葉～後葉、カマンダニ古窯跡は15世紀代と考えたい。
- (7)、田嶋明人氏の提唱される3期区分の中での戸津4号窯式期を示す。



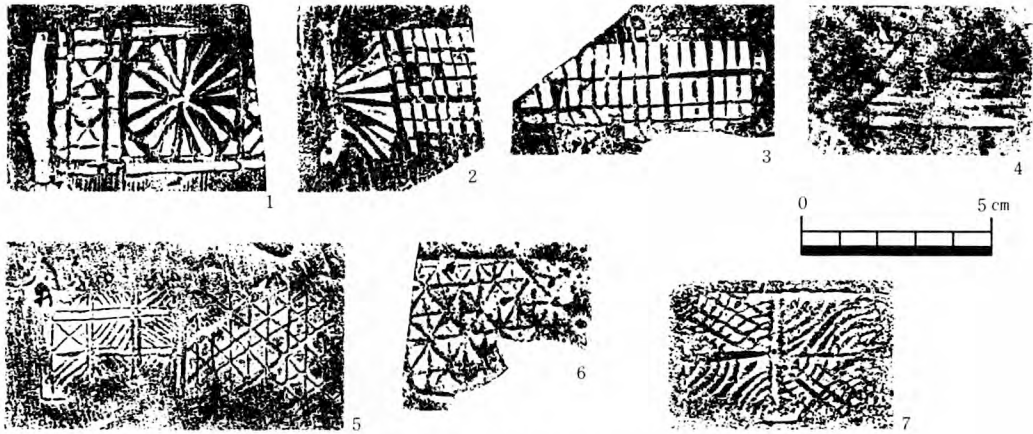
第8図 出土遺物実測図 (S = 1/3、1~10戸津古窯跡群、11~23二ッ梨横川古窯跡)



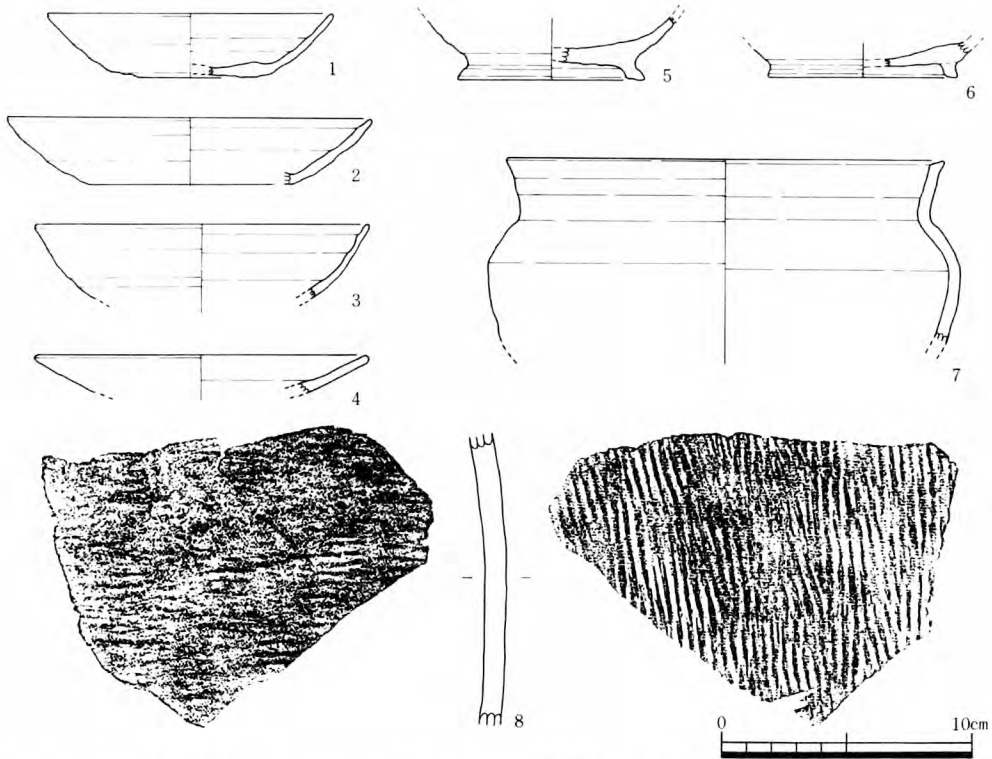
第9図 出土遺物実測図 (S = 1/3、1 ~ 15ニッ梨横川古窯跡)



第10図 出土遺物実測図 (S=¼、湯上谷古窯跡)



第11図 湯上谷古窯跡出土中世陶器押印文様拓影図 (S = 1/2)



第12図 出土遺物実測図 (S = 1/3、上荒屋ホウジョウヤマノ号窯跡)



若杉地区試掘調査風景



若杉古窯跡下方試掘調査風景



戸津古窯跡群遠景(南東より)



戸津古窯跡群西側斜面半壊須恵器窯跡



戸津古窯跡群東側斜面



ニツ梨横川古窯跡遠景(西より)



ニツ梨横川古窯跡灰層断面



湯上谷古窯跡近景(北東より)



湯上谷古窯跡灰層断面



上荒屋ハカントニ古窯跡遠景(北西より)



上荒屋ハカントニ古窯跡灰層断面



上荒屋ホウジョウヤマ遺跡北東支丘部遠景(北西より)



上荒屋ホウジョウヤマ1号窯跡近景



上荒屋ホウジョウヤマ遺跡北東支丘部
窯跡灰層と製鉄炉跡断面



上荒屋ホウジョウヤマ1号窯跡灰層



上荒屋ホウジョウヤマ遺跡南西斜面遠景(南西より)



上荒屋ホウジョウヤマ4号窯跡灰層断面



上荒屋ホウジョウヤマ2号窯跡灰層断面



上荒屋ホウジョウヤマ遺跡経塚近景



上荒屋ホウジョウヤマ遺跡五輪塔



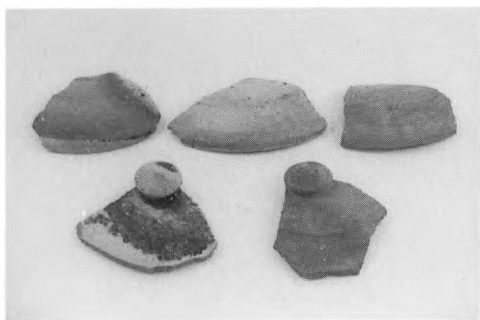
上荒屋ホウジョウヤマ遺跡五輪塔



上荒屋ホウジョウヤマ遺跡試掘調査風景



戸津古窯跡群出土遺物
左上：須恵器蓋
左：須恵器有台環
右上：土師器



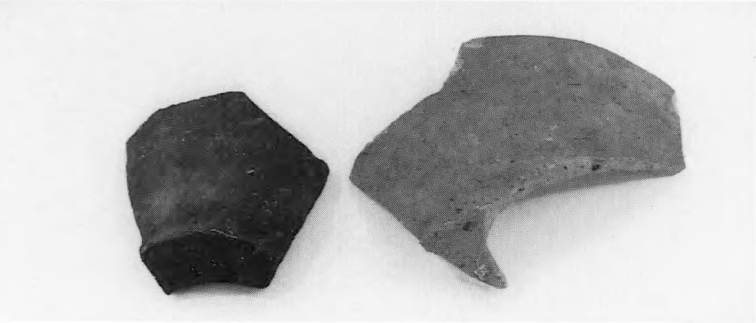
二ツ梨横川古窯跡出土須恵器 左上：蓋、右上：盤類、左下：坏類、右下：甕・埴



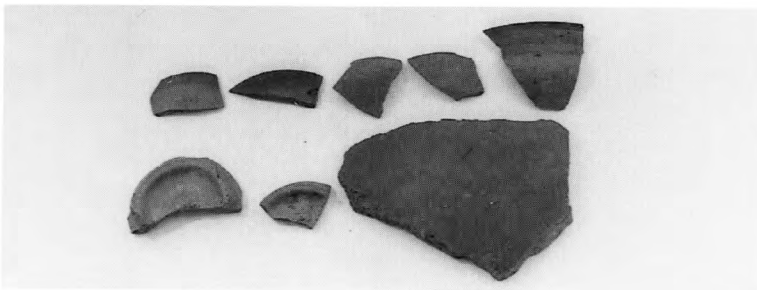
湯上谷古窯跡出土中世
陶器甕



湯上谷古窯跡出土中世
陶器押印文様



湯上谷古窯跡出土中世
陶器すり鉢



上荒屋ホウジョウヤマ1号
窯跡出土須恵器

